百済漢城時代及び熊津時代の寺院跡と屋瓦

戸田有二

目　次

一　百済国とその時代区分
二　漢城時代の寺院と瓦
三　熊津時代
四　熊津時代の寺院跡と瓦
　水原寺跡・南穴寺跡・舟尾寺跡・西穴寺跡・大通寺跡・晩日寺跡
五　寺院跡以外の遺跡と瓦塼
六　まとめ
　1　寺院跡
　2　屋　瓦
　　漢城時代・熊津時代

一　百済国とその時代区分

百済国は韓半島南西部を領域とした古代国家で『三国史記』によるならば、その成立が紀元前一八年河南の慰礼城にはじまったとされている。この時期は漢江流域での伯済国であるが初期の頃の実態はあまりはっきりとしたことがわかっていない。以後百済国はその中心が漢江流域の時代を経て半島南西部の錦江流域にその中心が移されるが、その後西暦六六〇年に滅亡した。新羅統一時代以前の半島諸国では日本と最も関係深かった国でその関係が『日本書紀』に見られる最初は神功皇后摂政前紀、仲哀天皇九年の新羅征討記事の終りに「高麗・百済二国王」と記載された記事である。以後日本との密接な関係が続くわけであるが特に聖（明）王三十年（欽明天皇十三年―五五二―）に百済より仏教が伝来し、その後崇峻天皇元年（五八八）、百済威徳王三十五年に百済からの使者及び僧が派遣され、仏舎利・僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工などいわゆる技術者等が贈られ、これらの集団によって飛鳥の地に造営された法興寺（飛鳥寺）が推古天皇四年（―五九六―百済威徳王四十三年）に竣工した。これは日本での本格的木造建築寺院のはじまりであり、以後約一世紀以上にわたってきわめて大きな影響を我が国にあたえることとなる。

この百済国の歴史を観る時その都の置かれた場所によって漢城時代・熊津(川)時代・泗沘時代の三時期に区分して考えられている。

漢城時代はB.C.一八～A.D.四七五年までの時代とされているが、そのはじまりは明らかでない。この時期は河南慰礼城に建国した時期をはじまりとして、その後三七一年平壌城の戦いで高句麗を破り漢山城に遷都するが、その後高句麗の侵攻により四七五年この漢山城を失い南下して錦江流域、熊津（公州）の地に都を移すまでの時代である。この漢城時代は特に魏・普時代との交流を深め国家体制を整備し強大な国家形成を目指した時期でもある。その領域は漢江流域で現在のソール市を中心とした地域であった。『三国史記』と『三国遺事』には次の様な記事が見られる。

『三国史記』百済本紀二　枕流王条

九月、胡僧摩羅難陁自晉至、王迎致宮内禮敬焉、佛法始於此。

二年、春二月、創佛寺於漢山、度僧十人、

『三国遺事』巻三　興法第三条

百済本記云。第十五（僧傳云十四誤）枕流王即位甲申（東晉孝武帝大元九年）胡僧羅難陁致自晉。迎置宮中禮敬。明年乙酉。創佛寺於新都漢山州。度僧十人。此百済佛法之始。

これらの記事はいずれも枕流王元年（三八九）九月に東晉から胡僧摩羅難陁によって仏教がもたらされたことを記載した記事である。これは半島において高句麗に仏教が伝来した十二年後のことである。そして『三国史記』ではその翌年、漢山に寺院を建立し、十人の僧の得度をしたとしている。しかしこの漢山に建立した寺院がどの程度の規模で、またどの場所に建立された何という寺院であるのか現在のところまったくわかっていない。

次の熊津時代はA.D.四七五年～A.D.六六〇年までである。この時期は高句麗の侵攻によって漢山城が落され、漢江流域から南下して半島南西部の錦江流域の熊津の地（公州）にその中心を移した文周王元年（四七五）から三斤王・東城王・武寧王を経て聖(明)王十六年（五三八）、日本では宣化天皇三年にあたり、錦江下流の扶餘（所夫里）に遷都するまでの五代六十三年間がこの時代である。日本書紀ではこの熊津について雄略天皇二十一年条で「久麻那利」として記載された場所で現在の忠清南道公州市である。

泗沘時代はA.D.五三八年～A.D.六六〇年までの時代である。聖(明)王十六年（五三八）日本では宣化天皇三年にあたるが錦江下流域の公州から約三六キロ程南の泗沘の地に遷都した年から、義慈王二〇年（六六〇）日本では斉明天皇六年まで、唐と新羅の連合軍によって泗沘城が陥落するまでの一二二年間の時代である。聖王の遷都した泗沘は当時所夫里ともいわれた場所であるが、この時国名を南扶餘としたといわれる。遷都の理由は高句麗に対する防衛と、任那地域、つまり南方の全羅道地域が百済の勢力圏になったこと、あるいは対外交流のための交通路の確保など、より国力体制強化をはかるためにあったものと考えられている。

二　漢山城時代の寺院と瓦

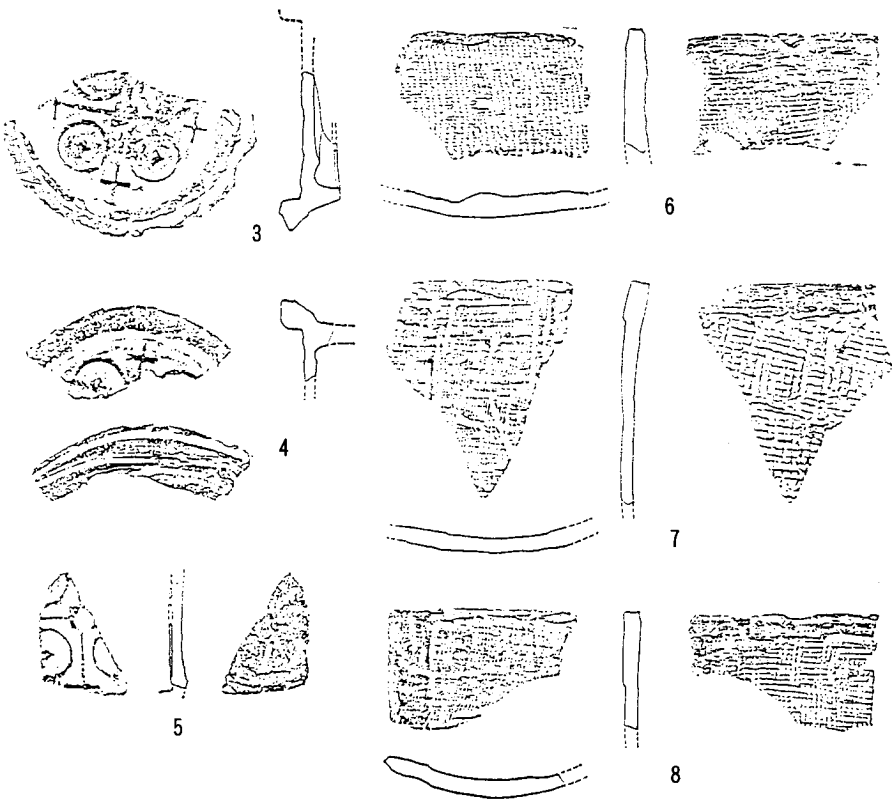
この時期『三国史記』と『三国遺事』では枕流王元年（三八九）九月東晋から胡僧摩羅難陁によって仏教がつたえられ、その翌年には寺院の建立がなされ、僧が十名得度したとされるが、この寺院がどこに建立されたものであるのかあるいは瓦葺き寺院であったのか明らかでない。またこの時期での瓦に関する文献記録では『三国史記』巻二十五百済本紀第三、毗有王三年（四二九）条に、「十一月地震大風飛瓦」と記載する記事が見られるが、この大風によって飛ばされた瓦がどういった建築物のものであったか明らかでない。

この時期の瓦としてソール地方を中心としたものについて黄寿永[1]・金元龍[2]・朴容塡[3]・井内功[4]・亀田修一[5]などによって論じられたものがある。黄寿永氏は一九四七年ソール市城東区広壮洞の山城跡出土の八葉蓮花文鐙瓦（図一―1）を取りあげその蓮弁の形態から北朝系様式の瓦当文様でその時期は百済に仏教が伝来した以後（三八九年以降）のものであることを指摘した。金元龍氏は一九六四年にソール大学によって実施された発掘調査で出土した風納里土城内出土の瓦を取りあげたものであるが、これらの瓦の出土状況が層位的に漢城時代のものであるのか的確な判断がされていない。また朴容塡氏はソール市三成洞より出土した瓦について、また井内功氏はソール市清潭洞遺跡から出土したもので、いずれも八葉素弁蓮花文鐙瓦である（図一―2）。これらの鐙瓦はいずれも表面採集のもので山城からの出土である。瓦当文様の特徴は高句麗系様式をもつものであり、かつ、公州・扶餘の地域では出土していない点などを考慮すると漢山城時代の瓦とすることができると朴容塡氏は指摘している。またこの瓦当文様は古くから日本との関連が指摘され直接大和豊浦寺式の祖型となったものであるとされる瓦でもある。その年代については必ずしもこの鐙瓦が漢城時代のみに古く考えるものではなくそれよりも新しい七世紀初頭にその製作年代とする稲垣晋也[6]氏、また六世紀後半とする亀田修一[7]氏の考え方もある。これとは別に註五は亀田修一がソール市江東に位置する石村洞四号墳及び隣接して南東に営なまれた同時期の竪穴式住居跡出土の瓦塼類について考察したものである（図一―3～8）。これらの瓦塼は竪穴住居跡出土以外は古墳盛土上の建物に葺かれたもので、その瓦の製作技法などの点から楽浪郡時代の瓦に類似することを指摘し、その時代を石村洞四号墳の年代である四世紀後半から五世紀初頭頃、つまり漢城時代の終り頃に近い時期に位置ずけたものである。

以上漢城時代としてあつかわれている瓦についての考え方であるが、この他にもこれらの瓦についてふれられたものはいくつかある。いずれにしても現在の所熊津時代以前の瓦として考えられている主なもので、これらはすべて現在のところ漢江流域でしか検出されておらず公州・扶餘では確認されていない。前述のごときA.D.三八四年東晋からの仏教伝来そしてその翌年の漢山での仏寺建立といったことが文献には見られる。また毗有王三年（四二九）十一月の『三国史記』に記載された「地震大風飛瓦」の記事などもある。しかし建立された寺院

1

2



3

4

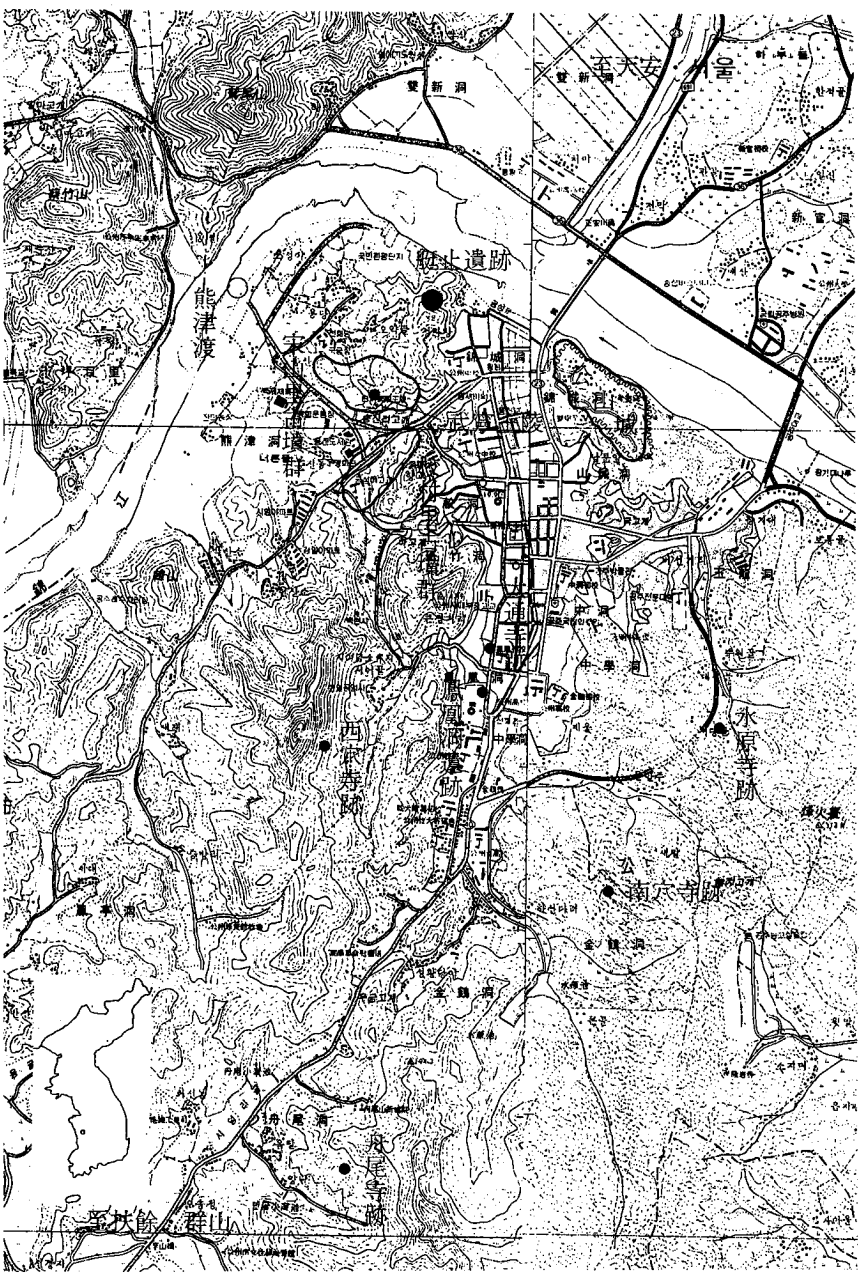
5

6

7

8

図
1　広壮洞山城出土
2　三成洞山城出土
3～8　石村洞4号墳及び近接住居跡出土　（註5より転載）



図二　公州における熊津時代寺院跡及び瓦塼出土遺跡分布図

が瓦葺きであったのか、また「大風飛瓦」が寺院の屋根に葺かれた瓦であったのかは明らかでない。そして現在まで発見されている漢山城時代といわれるこれらの瓦類あるいはそれ以外近年発見されている瓦はいずれも寺院建築に用いられたものではなく山城・古墳などの建築物に用いられたものである。そういった点を考慮すればこの地域でのこの時期の瓦葺きは寺院ではなく、一般的には古墳盛土上の建築物あるいは山城・城壁及びそれに関連する施設などに用いられたもので寺院建築に瓦葺きが行なわれる様になるのはこの百済の地域では公州時代に入ってから本格的に瓦葺き寺院建築が完成して行くものではなかったかと考える。

三　熊津時代

高句麗の侵攻によって漢山城の陥落により蓋鹵王二十年、王及び王族は高句麗の兵によって捕えられ殺害され、ここに一時百済は滅亡するに致った。この知らせは大和朝廷にもすぐにとどいたことは日本書紀雄略天皇二十年の次の記事で知られる。

廿年冬、高麗王大發二軍兵一、伐盡二百済一。爰有二小許遺衆一、聚二居倉下一。兵粮既盡、憂泣茲深。於是、高麗諸將、言二於王一曰、百濟心許非常。臣每レ見之、不レ覺自失。恐更蔓生。請逐除之。王曰、不レ可矣。寡人聞、百濟國者爲二日本國之官家一、所二由來一遠久矣。又其王入仕二天皇一。四隣之所二共識一也。遂止之。（百濟記云、蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍來、攻二大城一七日七夜。王城隆陷、遂失二尉禮一。國王及大后、王子等、皆沒二敵手一。）

廿一年春三月、天皇聞下百濟爲二高麗一所破上、以二久麻那利一賜二汶洲王一、救二興其國一。時人皆云、百濟國、雖二屬既亡一、聚二憂倉下一、實賴二於天皇一、更造二其國一。（汶洲王蓋鹵王母弟也。日本舊記云、以二久麻那利一賜二末多王一。蓋是誤也。久麻那利者、任那國下哆呼唎縣之別邑也。）

廿三年夏四月、百濟文斤王薨。

また日本書紀では翌雄略天皇二十一年には任那の下哆呼唎縣の別邑である久麻那利の地をもって百済国を再興し、蓋鹵王の子文周王が百済王室を継いだことも記載されている。一方韓国側の資料である『三国史記』では巻二十六　百済本紀第四には

文周王元年、冬十月。移都於熊津。

聖王十六年春移都於泗沘。（一名所夫里）　国号南扶餘。

とあり、また『三国遺事』でも巻二　南扶餘　前百済条に）

至二十二世文周王即位。元徵三年乙卯。移都熊川。（今公州。）歷六十三年。至二十六世聖王。移都所夫里。国号南扶餘。

とあり、いずれも文周王元年（四七五）都を熊津（熊川）に移し、また聖王の時代さらに都を熊津（熊川）から所夫里に移したとされる。この韓国側の史料では文周王元年（四七五）は「乙卯」の年となっている。この年を日本にあてるならば、この年は雄略天皇一九年にあたる。しかし前述の日本書紀の記載では、百済のこういった蓋鹵王から文周王に王位が継承される状況についてはその年代が文周王乙卯の年は「雄略天皇一九年」にあたり両者の年代に一カ年のずれのあること

は古くから指摘されているところでもある。文周王はこの二年後（四七七）に暗殺されるが、この年が日本書紀での文周王元年として熊津に百済国を再興したと記載された雄略天皇二十一年にあたる。またこの熊津の地も聖王の時代に都を所夫里に移したとあるが、百済国内での出来事についてはその滅亡に至るまでかなり詳細に日本書紀に記載されているにもかかわらず、この聖王十六年（五三八）の遷都についてはもちろんのこと、この時の遷都先である「泗沘」・「所夫里」・「南扶餘」の地名あるいは国名すらまったく日本書紀には記載されていない。またこの件については中国側の史料でも同様記載されたものはなく、聖王十六年（五三八）の泗沘遷都を伝えるのは韓国側の史料である『三国史記』・『三国遺事』あるいはこれらよりおくれて朝鮮王朝の時期に編纂された『東国輿地勝覧』などの史料だけである。いずれにせよこの時期は一般的にこういった韓国側の資料から文周王元年（四七五）から三斤王・東城王・武寧王の時代を経て聖(明)王十六年（五三八）泗沘に遷都するまでの六三年間の時代である。現在の忠清南道公州市であるが市内錦江の隣接した南岸丘陵には百済時代に築造された「公山城跡」がある。この城跡からは一九二〇年代以降、百済時代遺物の散乱が注目されて来た。その後この城跡より出土した文字瓦の中に「熊川」と叩きしめ用の板に彫刻した文字瓦が出土している（図三）。

この種の文字瓦はこの他にも公山城跡の谷をへだてた北西丘陵である艇止山からも出土している。先の『三国史記』ではこの地を「熊津」と記載し、『三国遺事』ではこれを「熊川」と記載しているがこの文字瓦がこれをうらずけるものである。公州の地域は当時「熊津」・「熊川」と書かれているがこれはどの様に訓んだものであろうか、現在の公州は「コンジュ＝곰주」、熊津は「ウンジン＝웅진」と訓んでいる。日本書紀では雄略天皇二十一年の記事に「久麻那利」と訓ませ岩波古典文学体系の日本書紀ではこれに「コムナリ＝곰나리」とカナをふっている（ハングルの곰나리は筆者があてたものである）。この熊津の訓読について今西龍博士は『百済史研究』の中で、「곰나루(kom naru)＝コムナル」と訓み、その意味は「곰＝コムを河」、「나루＝ナルは大」の意味をそれぞれもつものでるから「大河」という意味をもつものとされた[8]。これに対して軽部慈恩氏は熊津の訓読を次の様に考えられた[9]。錦江南岸に現在も地名として残されている「熊津渡」について、この熊津を土地の者は「곰나루＝コム

図三　公山城跡出土『熊川』文字瓦

ナル」と文字通りの訓読はせずに「고만나루＝コマンナル」あるいは「고만나리＝コマンナリ」と発音している。これはおそらく「고마루나리＝コマルナリ」から転訛したものであろう。この意味は「고」が「큰」と同じ「大」の意味で「말＝マル」は村あるいは部落という意味、「나루＝ナル」は河の意味をもっている。したがって「고말나루＝コマルナル」「熊津渡」は、大部落、つまり大都市の渡という意味あいのもので、大部落を控えた江・大部落の船着場であり、これは「大城の津」であり、また「百済の国都たる大都市」という意味で当時用いられたものであろうとするものである。

この熊津（川）について日本書紀では「久麻那利」と記載していることは前述のごときであるが、この他中国側の文献史料では『隋書』で居抜城、『周書』で固麻城、『北史』では居抜城・固麻城とし、『翰苑』では熊津城一名固麻城として記載していることは今西龍博士によって「百済五方五部考」[10]で早い時期に指摘されているところでもある。これらの漢字は当時「熊津」を百済人が訓んだ発音通りにあてたものと思われる。

この「熊津」・「熊川」は現在「웅진＝ウンジン」・「웅천＝ウンチョン」・公州は「공주＝コンジュ」と訓まれているが、この熊津（川）の地での公州に至るまでの呼び方の変遷については朝鮮王朝成宗の時代十五世紀末に編纂された『東国輿地勝覧』公州牧建置沿革に記載されている。

公州牧

【建置沿革】本百済熊川。文周王自北漢山城徙都之。至聖王。移南扶餘。唐高宗遣蘇定方。與与新羅金庾信。攻滅百済。置熊津都督府。留兵鎮之。唐師既去。新羅盡有其地。神文王。改為熊川州。置都督。景徳王改熊州。高麗太祖二十三年。改今名。成宗二年。置牧。十四年。置節度使。稱安節軍。屬河南道。顯宗三年。廢節度使。九年。降知州事。忠恵王後二年。以元朝平章濶濶赤妻敬和翁主外郷。陞為牧。本朝因之。

四　熊津時代の寺院跡と瓦

文周王元年（四七五）都を熊津（川）に定めた場所は現在の忠南公州市で漢城時代の中心であった漢江流域（現在のソール市）から南に約二〇〇㎞程の錦江流域で、聖王十六年遷都したとされる泗沘（扶餘）の北約三六㎞の場所に位置する。錦江は別名熊津江または扶餘付近では白馬江、白江・白村江と古くは記載された河である。その源は金羅北道長水郡長水邑に発し、幾重にも蛇行しながら北流し、忠南錦山郡の東部で東折し、忠北永同郡でまた北方に迂回し、大田市の東側から西方に流路を変て公州に至る。そして公州ではほぼ直角に南西方向へ流路を変えて扶餘・江景を通り群山から西海に注ぐ全長四〇一㎞の大河である。河口の群山は熊津時代・泗沘時代を通しての対外交易、特に日本・中国との往来する津が置かれた場所であった。公州はこの錦江の中間地点よりやや河口寄りに位置する。公州で錦江はほぼ直角に南西方向へ流路を変えた付近の南岸に入り込んだ谷あいの地域が熊

津時代からの中心地域である。北東から北西にかけては錦江によって遮断され、南岸は南北約四㎞、東西約〇・五～〇・八㎞、河岸近くでは約一㎞程の広さの谷あいとなっている。東側は水原山から金鶴山までの丘陵がつらなり、南は舟尾山、西側は錦江の南岸で艇止山、宋山里・校村里の丘陵を経て鳳凰山と南にいくつかの山麓をつらねる丘陵が舟尾山に連結している。公州はこういった四方を自然要害によってさえぎられた、まさに北に守りをもった地形である。その中心は谷あいの北側錦江南岸に位置する独立丘陵で新羅時代には熊山城（곰산성）、現在は公山城（공산성）といわれる山城である。熊津時代には百済王宮が置かれ、統一新羅時代には熊津都督府の置かれた場所である。また寺院跡は東側丘陵地帯に水原寺跡、南穴寺跡が、南側の丘陵で舟尾寺跡が、西側丘陵で西穴寺跡、鳳凰洞遺跡、大通寺跡などがある。またこれらとは別に瓦塼をもつ遺跡として艇止山遺跡・宋山里古墳群、校村里古墳群など北側の艇止山西麓に分布し、特に宋山里古墳群は古くから百済王陵と考えられ昭和四十六年には武寧王陵も発見された古墳群である。以下これらの寺院跡及び古瓦塼出土遺跡について、概観する。

水原寺跡

この寺院については『三国遺事』巻三弥勒仙花条に記載された記事から百済時代の寺院とされて来たものである。寺院跡は公州市王瀧洞に所在し、一九六六年より国立公州博物館によって発掘調査が実施されているがこの調査では統一新羅時代の石塔及び蠟石小塔、基壇側面の石材などが検出されたが百済時代の遺物・遺構については確認されなかった。その後この寺院跡については一九八九年公州大学によって調査が実施されている。[11]

南穴寺跡

公州市金鶴洞の南山西斜面中腹にあり隣接して南西には金鶴洞古墳群がある。南山は標高二六〇m程であるがその中腹に石窟があり、寺院はその下方にある。この寺院跡について最初に言及したのは軽部慈恩氏[12]で、その後同氏の『百済美術』でもこれを取りあげている。[13]その後解放後は朴容塤氏の調査研究などがある。[14]南山中腹の石窟は西面し、入口は幅一・八五m、高さ二・二～二・三五m、奥壁まで約十一mあり、前室と後室に区画されている。前室は約八畳敷程で、後室は約十畳敷程の広さをもつ。前室北壁下には東西約三・二m、南北約一・二五mの仏像を安置したと考えられる台層が削り出されている。昭和三年頃この場所より石仏胴体片二点出土したといわれているが、現在それらについては所在不明である。寺院はこの石窟の西方下約一二〇m程の緩斜面に、南東方向で三段の平坦面を削り出し堂塔を造営したもので、この最上段に金堂が置かれたと朴容塤氏は前記論文の中で推定している。寺院の形態及び立地は西穴寺ときわめて類似し、またここからは軽部慈恩氏によって採集されたとされる百済時代の鐙瓦と文字瓦が存在したといわれるがこれらの瓦類が現在どこにあるか明らかでない。この文字瓦は軽部慈恩氏によると「棟梁或無一早造干順且賢」の十一文字が存在するといわれこれは南穴寺跡から発見されたものと

同じものであるからその創建が南穴寺と同時期であるとしている。

舟尾寺跡

公州市利仁面舟尾里に所在する。現在まで百済時代とされて来た寺院跡であり『東国輿地勝覧』に「舟尾寺在舟尾山」と記載されている寺院であるため朝鮮時代十五世紀初頭にはまだ存在したものと思われる。寺院についての記載ではないが『三国遺事』巻三塔像第四　弥勒仙花未尸郎　真慈師条で、新羅の花郎制度についての説話の記事の中に「……此去南隣千山……」と記載されたもので、この千山が現在の舟尾山であるとされている。この山は公州市街から約四㎞程扶餘寄りの南に存在する海抜三八〇m程の山である。寺跡はこの舟尾山南西中腹海抜約一六〇m程の場所で、この場所は南面する緩斜面となり、この一部に平坦面がありこの場所に寺院跡がある。寺跡は果樹園など後世の農作物等の耕作にともなう開墾等によって削平されているため、はっきりとした全体遺構の確認はむずかしいが、一か所で石積基壇跡が確認でき、これが金堂跡と推定されている。この場所での礎石は合計十六個確認できるが一部は露出しているものもあるが、これらの中には原位置から移動したものもありその正確な規模についてはあきらかでない。この推定金堂跡南側には隣接して石燈台石が残存し、その南西には自然岩石に穿たれた舎利孔が

図四　舟尾寺跡出土鐙瓦

ある。この舎利孔は花崗岩の自然石に穿ったもので直径二五㎝、深さ九・五㎝の円孔で、その上には浮屠を安置したものと思われ、一辺約三五・五㎝の浮屠身座の痕跡が認められる。また石燈台石から北に約十mの場所に塔跡がある。また舎利孔の西側岩盤には石窟が掘られている。この石窟は西向きに開口して、入口の高さが七〇㎝、幅一・〇二m、内部は奥行き三・二m、幅一・三m．高さ一・二mを計る。[15]出土遺物は推定金堂跡の周辺より出土した鐙瓦・宇瓦・男瓦・女瓦などあるがこれらの瓦類の中には百済時代と考えられるものが一部認められる。以上舟尾寺跡についての概要であるがこの寺院跡も従来百済時代の石窟寺院と考えられて来たものであるが、朴容塡氏等の調査結果、創建当時の伽藍が石燈・塔・金堂が南北線上に配置され、かつ石窟を伴なう寺院であることがわかった。[16]また創建年代については出土瓦から百済熊津時代にさかのぼるものと思われる。

西穴寺跡

公州市熊津洞の望月山東側中腹に所在する寺跡は南側斜面に位置する石窟の南方約五〇mの場所を南北方向に整地して伽藍を築造したものである。西穴寺については『三国史記』・『三国遺事』あるいはその後に編纂された『東国輿地勝覧』などには記載されていない寺院跡である。この寺院跡を西穴寺として世に出したのは一九二九年軽部慈恩氏によってである。[17]寺院名を西穴寺としたのは寺跡から出土した多くの瓦の中に「西穴寺」銘のある文字瓦が発見されたことからである。これらの発見された瓦は最も古いものが百済時代のもので、この寺院

図五　西穴寺跡出土瓦　上八葉素弁連花文鐙瓦
中「西穴寺」銘文字瓦　下「三宝」銘文字瓦

つ寺院跡であることが想定された。出土遺物中には「西穴寺」・「三宝」銘のある文字瓦及び素弁八葉蓮花文鐙瓦などあるがこの他に統一新羅時代の瓦類も多く出土したとされている。また発掘された石塔をふくむ建物跡は統一新羅時代のもので百済時代の建物跡は確認されていない。また同寺出土の八葉素弁蓮花文鐙瓦は大通寺跡及び舟尾寺跡出土瓦ときわめて類似するものである。

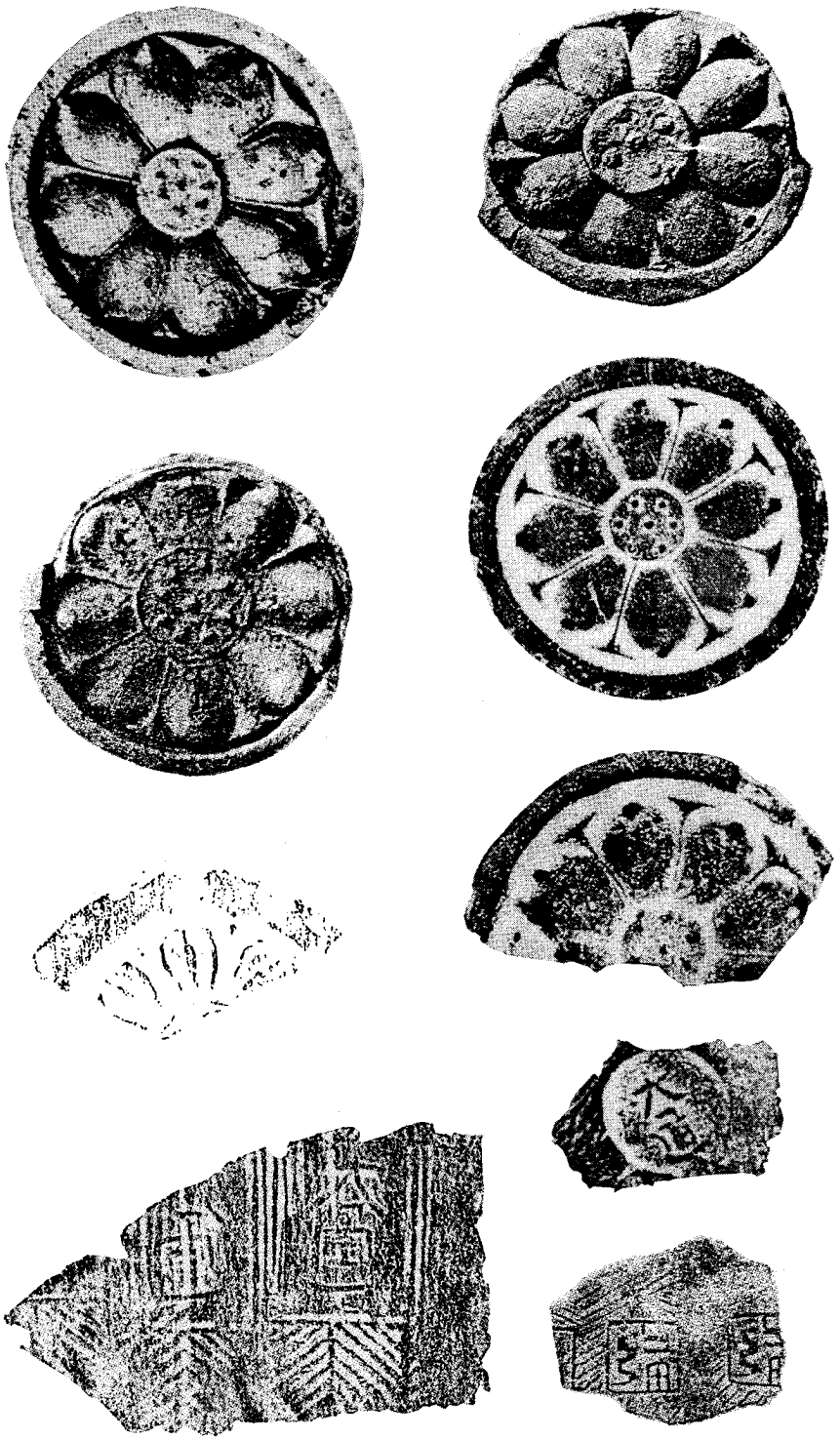
大通寺

公州市班竹洞に位置する。大通寺については『三国遺事』巻三　原宗興法条に次の様な記載がある。

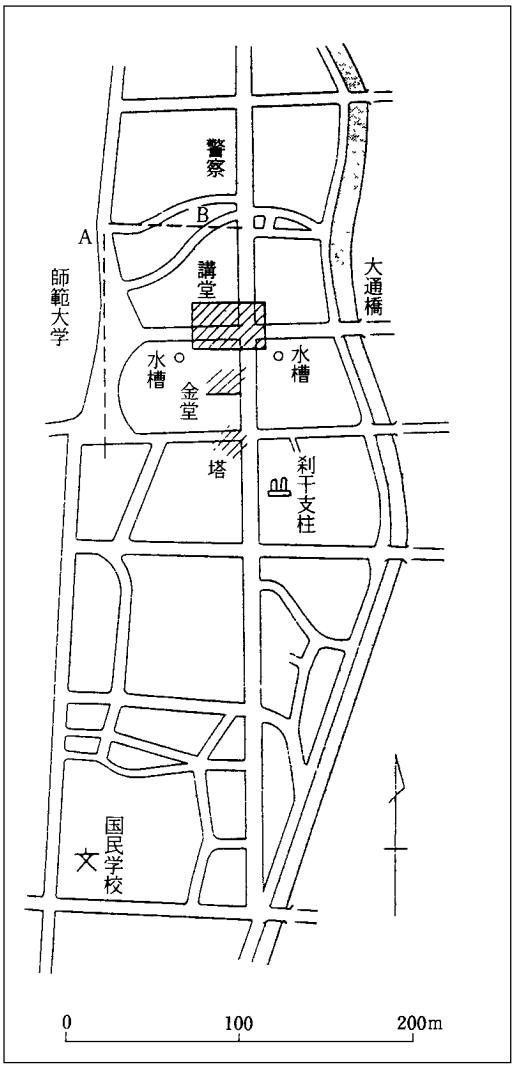
又於大通元年丁未。為梁帝創寺於熊川州。名大通寺（熊川即公州也。時屬新羅故也。然恐非丁未也。乃中大通元年己酉歳所創也。始創興輪之丁未。未暇及於他郡立寺也）。

この記事では大通寺が新羅に建立されたことになっているが大通元年は百済聖(明)王五年にあたるため「時属新羅故地」は百済の誤記であろうことは古くから指摘されているところである。いずれにせよ大通は中国南朝梁の年号で、大通元年丁未の年は西暦五二七年で日本で

は火災にあったと思われ瓦類には火を受けた痕跡が見られる。現在国立公州博物館屋外に石仏が展示されているが、これは一九二七年に同寺跡で発見された統一新羅時代の石仏である。解放後は金永培氏によって発見収集された八葉素弁蓮花文鐙瓦[18]、あるいは朴容填氏の研究成果[19]などがある。特に一九七〇年の「公州西穴寺址に関する調査研究1」では西穴寺跡の発掘調査成果にもとずいて考察したもので、それによるならば発掘調査は一九六九年九月に実施され、その結果東西九・〇五m、南北五・八五mの金堂基壇と金堂基壇西端から南に約九mの場所で一辺一・二mの石塔地覆石が確認され、金堂南側に双塔をも



図六　大通寺跡出土瓦



図七　大通寺跡実測図　軽部慈恩著『百済遺跡の研究』より

は継体天皇二十一年にあたり、大通寺の創建年代である。遺跡については公州市内ほぼ中央にあり、現在の公州教育大学北側の鳳凰洞遺跡と隣接した北側に位置する。現在この場所には統一新羅時代の幢竿支柱が残存し、この一帯が大通寺跡とされている。現在この場所より出土した百済時代の石槽一双が国立公州博物館に移され屋外に展示されている。軽部慈恩著『百済美術』[20]によるならばこの石槽については大通寺跡講堂と考えられる基壇南側左右に一双で出土したもので、このうちの一方は公州郡庁前に移されその後公州博物館に移されたものである。またもう一方は推定講堂南側向って左側に置かれていたもので、大正初年にこの石槽は当時の公州本町所在の憲兵分隊営庭に馬の給水用石槽として移転した。その移転のさい石槽の周縁の一部を破損したものである。またこの石槽については、李朝中期頃、石槽に菖蒲を植えて詩を楽しんだことが文献に残されている。

一方寺跡については正式な発掘調査は実施されていないが、これについても『百済美術』によるならばこの場所での下水道工事で瓦類・基壇の羽目石・束石・礎石等が多く出土したという。これらの出土状況からそのそれぞれの位置を五百分の一の地図にあてはめた結果、正確な数値は若干問題があるものの、南から塔・金堂・講堂と一直線上にならぶ伽藍配置が想定された。

講堂跡と推定される建物は北側に南面しているが西に約二十度振れている。基壇は幅五五㎝、厚さ七㎝、長さ一・六ｍの板石を横に立てて並べ四隅には束石を立てた一段の基壇で東西（間口）約五十三㎝、南北（奥行）約二五㎝を計る。この講堂跡の南東及び南西隅外側には

それぞれ石槽（現在公州博物館野外に展示）一双が置かれていた。講堂跡の南には基壇南辺と考えられる一端が確認され、講堂基壇南辺から約四十三メートルの位置にあったという。そしてこの基壇南辺の南側でその距離は明らかではないが礎石及び瓦等が多く出土したといわれる。この様な状況から見てこの場所が塔跡と推定されその北側の建物基壇は金堂跡となる。塔跡より南に約五十六メートルの若干東に寄った場所に幢竿支柱が存在したという。この幢竿支柱は現在も同じ場所に現在する。また講堂跡北及び西側外には東西・南北方向の石積が存在しているがこれを寺城の外郭と考えられた。古瓦については現在まで確認されているものは八葉素弁蓮花文鐙瓦四種以上の他新羅時代のものもある。また文字瓦に「大通」「通」などがある。鐙瓦では西穴寺跡及び鳳凰洞出土のものと同笵関係にあるものもある。

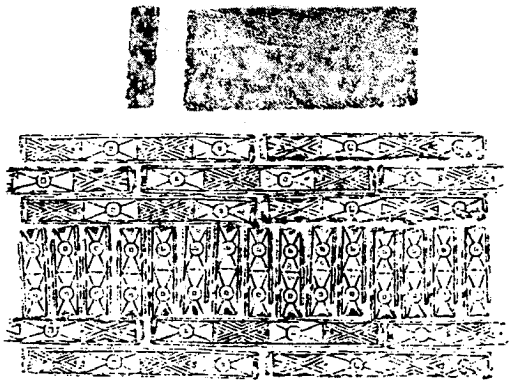
晩日寺跡

天安市聖居面の聖居山中腹に所在する。この寺院についても軽部慈恩氏によって世に出されたもので[21]、一九四六年以降は金永培氏[22]、李殷昌氏[23]などのこの寺院に対する考え方がある。この寺院跡は石窟寺院跡で二個所ある。一カ所には約一・三m程の高さをもつ釈迦如来坐像が浮き彫りにされ、もう一カ所には約三m程の磨崖仏が彫られている。この一方の磨崖仏には木造の屋根を葺いたと推定できる棟梁を差込む小孔が穿たれている。さらにこの木造建築の基壇も切り石で作られている。以前は石窟の内外に石仏断片が多く散乱していたといわれ、これらの石仏には百済時代のものから高麗時代までのものが混入していたといわれている。百済時代の石仏はいずれも北魏様式のもので雲岡第三窟脇侍菩薩に類似するものであることも指摘されている。これらの石仏断片とともに蓮花文鐙瓦断片も採集されたといわれるがこの鐙瓦文様は北魏式のものであったといわれる。しかしこの瓦については現在その所在が明らかでない。

五　寺院跡以外の遺跡と瓦塼

熊津時代の古瓦塼出土地について寺院跡以外の遺跡として宋山里六号墳、武寧王陵、校村里古墳群、艇止山遺跡、鳳凰洞遺跡、公山城跡などがある。

宋山里古墳群は現在の公州市錦城洞に所在する古墳群であるが以前、この地域が宋山里といわれた場所である。公州市街は北流する済民川によって二分され、北で錦江に合流する。河口付近から西側に艇止山の丘陵が南北方向に発達するが、この丘陵南斜面に営なまれた古墳群である。発掘調査は昭和二年学術調査として実施されたことにはじまる[24]。この時の調査はすでに確認されていた五基の古墳のうち一号・五号墳（塼築）二基の調査であった。そしてその後昭和五年にその他の古墳の中にも塼槨をもつものが確認され[25]、そして昭和七年（一九三一）には六号墳の排水溝が発見され、翌八年（一九三二）この排水溝をもつ六号墳は塼築の埋葬施設をもっており、かつ玄室内には四壁に四神図壁画の描かれていることも判明した[26]。そしてこの壁画は高句麗壁画ときわめて類似するものであることは多くの研究者の指摘すると



図八　宋山里6号墳塼

ころでもある。解放後昭和四六年（一九七一）年七月、宋山里六号墳の玄室内温気除去と室内照明設置のための工事実施にあたり、五号墳と六号墳の中間地点に南北方向の排水施設を掘り進めた時、北側で六号墳とほぼ同型の羨門につきあたった。いわゆる武寧王陵の発見である。この古墳群の存在する地域について『東国輿地勝覧』公州条には次の様な記載がある。

郷校。在州西三里。西有古陵墓。諺傳百済王陵。未知何王。

つまりこの地域の古墳群については十五世紀の朝鮮王朝時代には「百済王陵」の存在が伝承されていた地域である。

これらの古墳での埋葬施設に使用された塼は宋山里六号墳ではその主流が長さ四十一・八㎝、厚さ四・五㎝で両面を縄で整え、一方の木口に文様を施し、三方の木口は無文とするものである。塼を積みあげた時玄室の内側になる部分の文様は凸線による対角線と銭文を組み合わせたものが、一部羨門の閉塞用に使用された塼には四隅に珠文を配した八葉蓮花文塼と六葉蓮花文の組合わせによる塼がある。（図八・九）

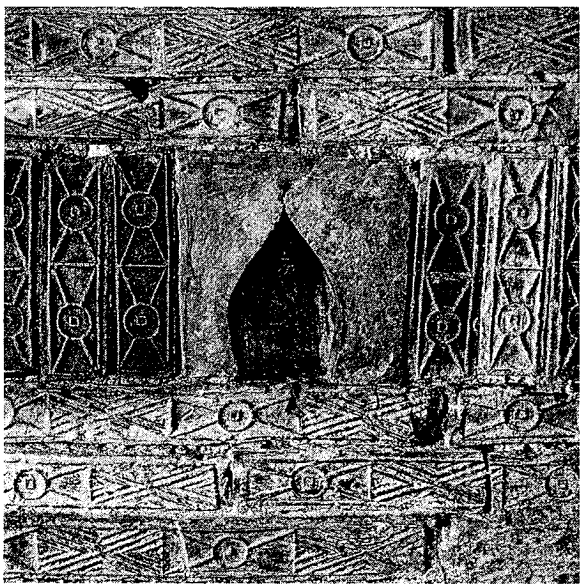
またこれらの塼とともに宋山里六号墳では羨門閉塞用塼の中に銘文入塼が出土している（図九下）。この塼は上下面が縄で、短側面木口一方に八葉素弁蓮花半截文（武寧王陵塼と同一）で、長辺側面に釘状具によって文字が書かれている。銘文は「梁官瓦為師矣」と判読され、これによって当時の造瓦が南朝梁の官用瓦を百済では手本として行なわれていたことが明らかになった。(27)

また武寧王陵の塼は全体で三十種程近くあり、この中には数種の蓮花文塼がある（図十）。これらの蓮花文塼には素弁八葉と素弁六葉の二種の蓮花がある（図十）。八葉素弁蓮花文の塼は短側面中央に蓮花文を置き、その四隅に忍冬文を配置したもので、これを半截して左右二枚で一組としたものである。蓮花文は花弁端部に丸味をもち、弁端は鋭く反転するものと、反転するがそれよりやや鋭さを欠ものの二種ある。前者は中房が凸形で蓮子は一十八課となる。なおこの種の塼には四隅の忍冬文に変ってそれぞれ珠文を配するものもある。また武寧王陵羨門閉塞用に使用した塼の中には長側面に釘状具によって「……士　壬辰年作……」と書かれた銘文入塼が一点確認されている。

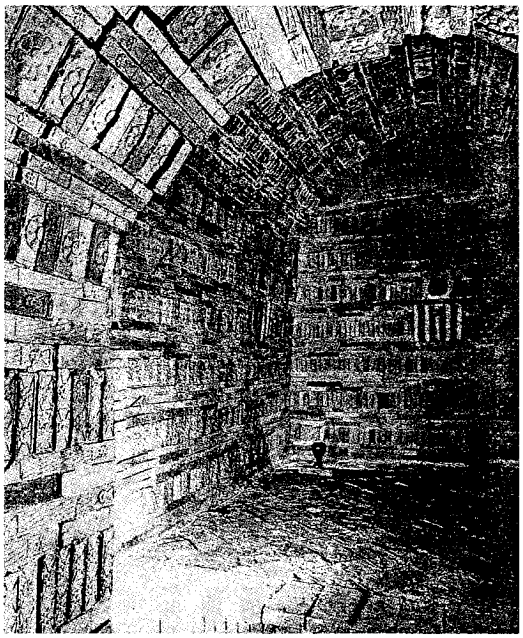
校村里古墳群は宋山里古墳群の丘陵隔てた南側に校村里の丘陵が南北方向に発達する。古墳群はこの丘陵東側に営なまれたものであるといわれるが、古い頃より破壊された古墳が多くあり一九三〇年代にはこの古墳群の中で数基しか残存しておらず、これらも完全な形で残っ

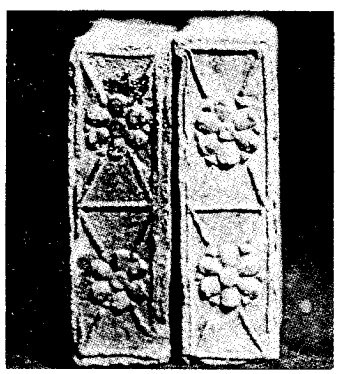
ているものは一基もない。そして現在はこれらの古墳の痕跡はまったく見られない。軽部慈恩氏の『百済遺跡の研究』によるならば昭和初期頃には二基（二・三号墳）の塼築埋葬施設をもつ古墳が存在し、そのうち一基（二号墳）はほぼ南面して塼槨を構築していたといわれる。[28]この槨を築造した塼には上下両面に縄及び無文のものがあり、一方の木口は対角線文と六葉素弁蓮花文の組合せ、八葉素弁蓮花文の半截（図十一）、さらには八葉素弁蓮花文と忍冬文の組合せの塼があり武寧王陵での塼文と同笵のものである。この他校村里古墳群の塼はその後に宋山里古墳の補充材の一部として転用され、あるいは大正十二年に発見された大通寺跡寺域内の井戸状遺構（図十一）に枠として使用されていたといわれる。[29]以上の点から宋山里六号墳・武寧王陵・校村里二号墳で塼築の埋葬施設としては使用された塼は同笵・同一のものであることが判る。

艇止山遺跡は武寧王陵の営なまれた（宋山里古墳群）済民川の河口

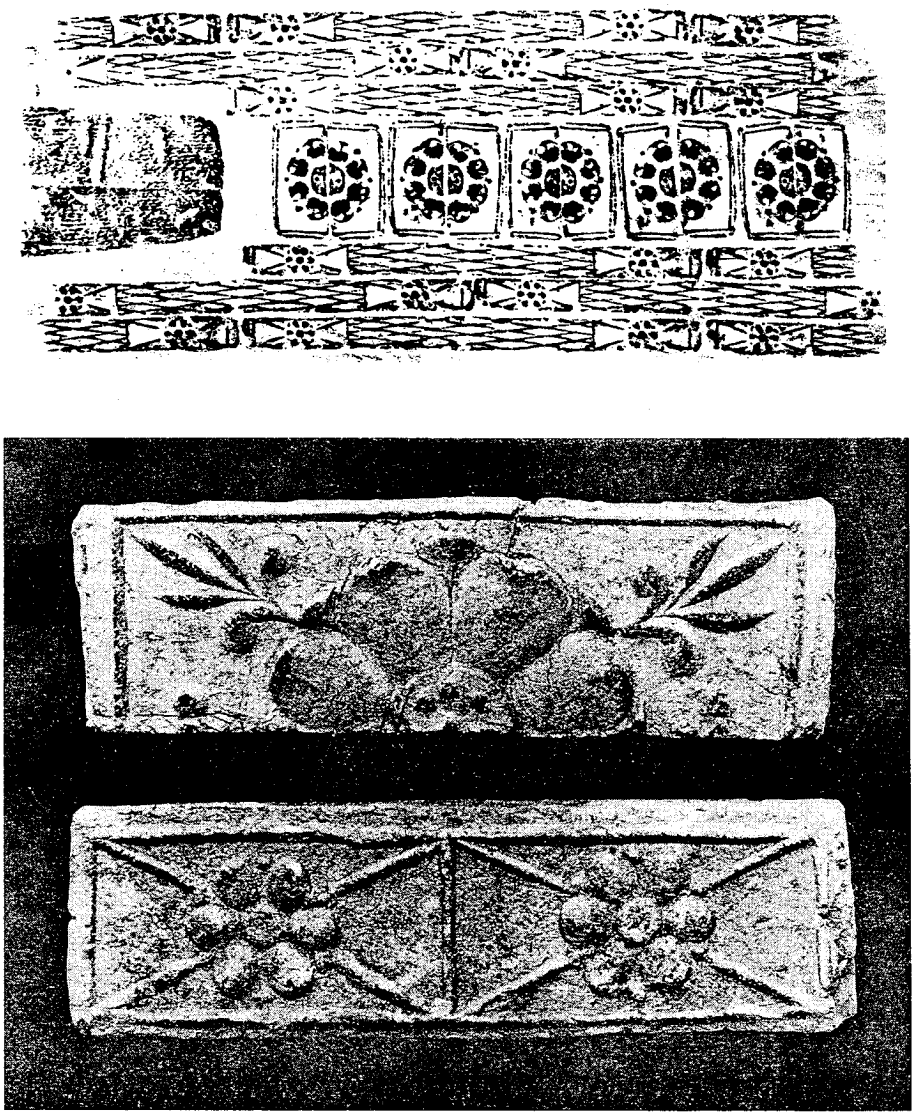


図九　上　宋山里６号墳玄室内部
　　下　宋山里６号墳出土銘文入塼



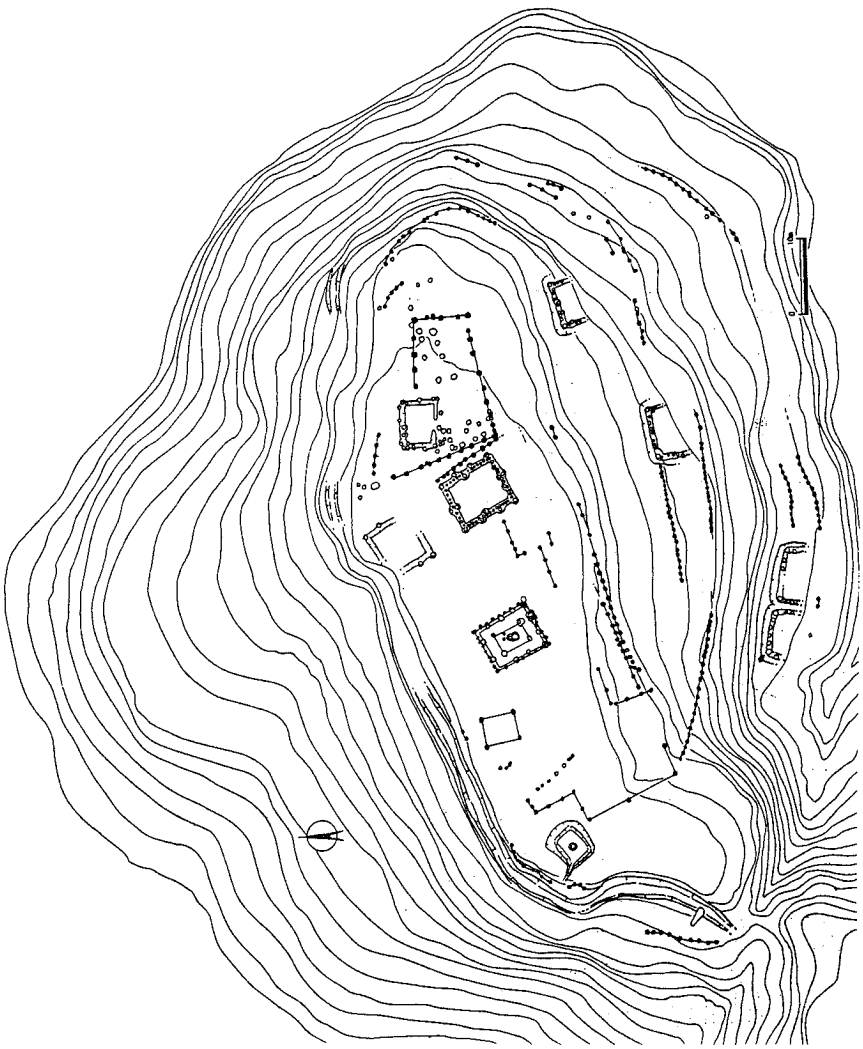


図十　武寧王陵玄室及び塼



図十一　上　校村里２号墳塼
下　大正12年発見の大通寺跡井戸状遺構枠用材として転用された塼

西側の南北方向に発達した艇止山丘陵の北端に位置する。艇止山北東斜面は一部削平され平坦面となっているがこの場所は済民川河口北西岸丘陵にあたり、北東対岸は正安川河口、さらに南西対岸の独立丘陵は熊津時代王宮の置かれた公山城跡である。この場所からは古くより瓦・土器片の出土することが知られている。遺跡は現在計画実施中の公州・扶余間の道路建設に伴なってその通過予定地となったため一九九六年度に発掘調査が実施された。[30]その結果熊津時代、泗沘時代・統一新羅時代・高麗時代の遺跡が中心であることが判った。熊津時代の遺構にはⅡ期の時代があり、前半は三十軒程で構成された集落跡と後半がこれらの集落を撤去して造営された施設の存在した時代である。

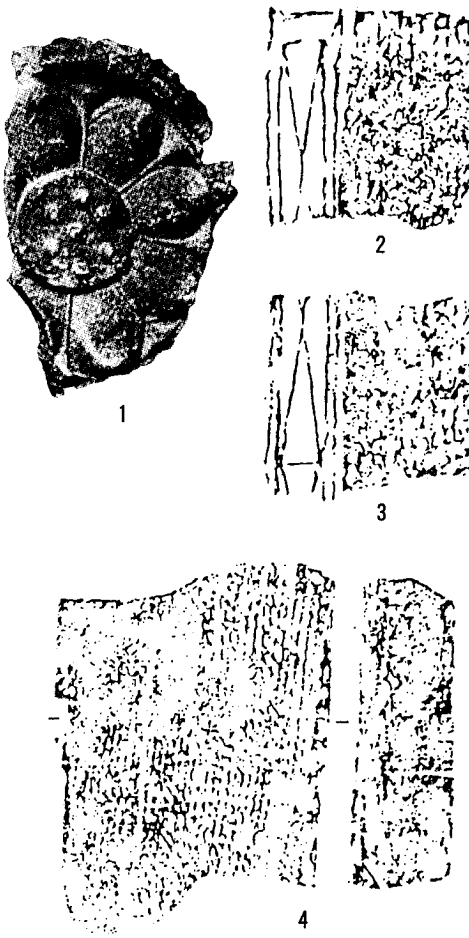


図十二　艇止山遺跡遺構全体図

これら後半の施設は掘立柱による大型の建造物が企画性をもって配置されたものであるが、尾根状に営なまれていた集落を撤去してこの尾根をさらに平坦に造成し、周囲を幅約五m、深さ約二m以上の壕によって囲んだもので出入口を武寧王陵の位置する宋山里古墳群方向に設置している。（図十二）壕によって区画された内部には建物群が確認されているがこれらの建物群の中には瓦葺き及び塼を用いたものが存在するが、これらの建物は礎石及び基壇をもたない。一は八葉素弁蓮花文鐙瓦で瓦当面径十三・二㎝、厚さ中央で一・二㎝、花弁長約三・二㎝を計る。花弁は弁端がいくぶんか丸味をもち反転するがあまり鋭さはない。間弁は弁端が高く逆三角形を呈し花弁をつつむ形で中房に連結する。中房は凸形で蓮子は一十六課を配する。二～四は塼であるが上下両面ともに縄で一

方の木口に斜格子を施したもので宋山里六号墳及び武寧王陵塼と同種のものである。これらの瓦塼の出土した遺跡は周囲を壕で囲んだ中に建物群をもつものであるが、これらの遺構はその他の遺構との切り合い関係から六世紀前半から中頃にかけての時期に営なまれたものとされている。

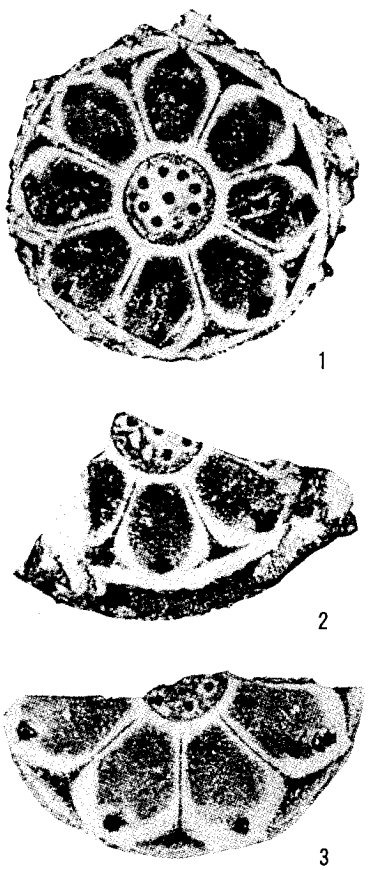
鳳凰洞遺跡は公州市鳳凰洞に位置する。市街地南側で丘陵上ではなくほぼ平坦地に営なまれたものである。現在古瓦の出土する地域は南側で公州教育大学が、またその北側には公州市役所庁舎がそれぞれ建



図十三　艇止山遺跡出土瓦塼　1鐙瓦・2～4塼

てられているが発掘調査は実施されていない。遺跡の北側には隣接して大通寺跡が存在するがこの鳳凰洞遺跡はその性格が寺院跡であるのか官衙であるのか現在のところ明らかでない。出土瓦（図十四）には八葉素弁蓮花文鐙瓦が二種ある。一種は一で瓦当面周縁は欠失してないが内区径は十㎝、花弁の長さは三・四㎝、花弁の最大巾は二・五～二・七㎝を計りほぼ均正に整っている。弁端は反転突起し、間弁も同様である。中房は凸形で径三・一～三・三㎝を計り、蓮子は一＋八課である。二は一と同笵で、三は同じく八葉素弁蓮花文であるが花弁の反転が点珠形式で中房内蓮子も一＋六課である。

公山城跡は公州市錦城洞にある。公州市街北側を西流する錦江は南折して南流する付近より約一㎞程東で、南流して錦江に注ぐ天安川と、その対岸で市街を北流し済民川が錦江に注ぐ。公山城はこの済民川河口東岸に発達した独立丘陵で北側は錦江で遮断される。東西約八〇〇m、南北約三〇〇m程の丘陵で東西二分された丘陵である。この丘陵上では一九二〇年代以降百済時代遺物の散乱することが指摘されその後多くの遺物が採集されている。また昭和七年には公山城跡に遊覧道路設置に伴なって掘立建造物跡及び古瓦片が出土し、その後も礎石をもつ建物跡が確認されている他、多くの古瓦片が日本時



図十四　鳳凰洞出土鐙瓦

・八㎝、厚さ中央で一・五㎝を計る。花弁は弁端突起形式である。五は最っとも瓦当面径が少なく、十二・五㎝、厚さ中央で二・四㎝、中房径二・八㎝を計る。花弁端は丸味をおびいくぶんか反転するがあまり鋭くはない。中房は凸形で一＋八課の蓮子を配す。

五　まとめ

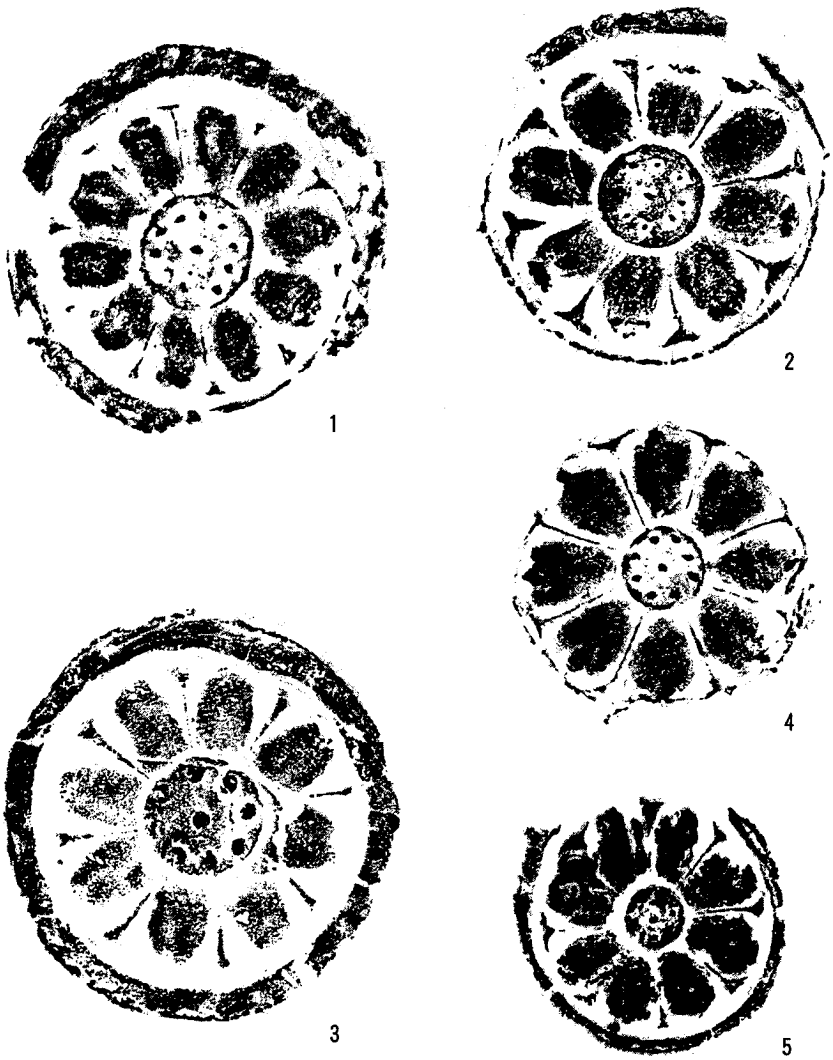
1　寺院跡

以上が漢山城時代及び熊津時代の寺院跡及び瓦である。まず寺院跡については『三国史記』で枕流王元年（三八九）東晋から仏教が伝えられ、その翌年には寺院の建立が行なわれ、僧が十名得度したとされるから、これは寺院として完成したとしてもその規模があまり大規模ではなかったものと考えられる。いずれにせよこの寺院がどの様な規模のもので何という寺院で、どこに建立され、あるいはどの様な形態の寺院で瓦葺きであったものかどうか等等一切判っていない。

熊津に都を定めた文周王元年（四七五）以降泗沘に遷都するまでの六三年間に建立されたと考えられる寺院跡は水源寺跡、南穴寺跡、舟尾寺跡、西穴寺跡、大通寺跡、晩白寺跡などであるとされて来た。そしてかつてからこれらの熊津時代での寺院には二つの形態があることも指摘されて来た[36]。

その一形態が山の中腹傾斜面に石窟を随伴して建立された石窟寺院

代軽部慈恩氏によっても確認されているといわれる[31]。解放後は一九八〇・一九八一年[32]、一九八五・一九八六年[33]、一九八七・一九八八年[34]、一九八九・一九九〇・一九九一年[35]度にそれぞれ発掘調査が実施され徐々にその内部構造が明らかになりつつある。図十五は現在まで出土した鐙瓦の一部である。一は十葉素弁連花文鐙瓦で瓦当面径十八㎝、中房径十五㎝、厚さ中央で約二・八㎝を図る。花弁は弁端に丸味がありいくぶんか反転する。中房は凸形で蓮子は一＋八課、三は瓦当面径十八・五㎝、厚さ中央で一・七㎝、中房径五・六㎝を計る。花弁は弁端にかけて丸味をもち、弁端はいくぶん高くなるものの反転形式はとらない。中房は凸形で蓮子は一＋八課である。一～三までは比較的大型の瓦当面をもつ。四はこれらよりやや小型であるが周縁は欠失してない。中房は凸形で蓮子は一＋八課である。瓦当面内区径十三㎝、中房径三



図十五　公山城跡出土瓦

形式のものである。この寺院形態が最っとも多く南穴寺跡、西穴寺跡、舟尾寺跡、晩白寺跡などがこの形態の寺院跡である。南穴寺跡では標高二六〇mの南山中腹、標高一六〇m程の場所に石窟が西に面してあり、その西方約一二〇mの南斜面に三段の平坦部を削り出して伽藍を構成したもので、また舟尾寺跡では舟尾山西中腹標高一六〇m程の場所に石窟をもち、この東側に三段の平坦地を造成してそれぞれ南端は石積によって整えられている。[37]一方の西穴寺跡の場合望月山中腹に南向きの石窟をもち、その南側に伽藍を備えた寺院である。つまりこの形態の寺院跡は基本的には山腹に存在する自然窟に手を加えたもの、あるいは人工的に石窟を穿ったものなどある。これらの石窟にはその中に仏像を安置した礼拝窟、さらには修行窟としたものである。またこの石窟に近接して伽藍を構えたものであるが、その伽藍の方向はいずれ

も南北に主軸をもつが、山腹の斜面の方向あるいは石窟の向きなど統一されたものではない。これらの寺院跡はその創建が文献及び出土遺物によって熊津時代に位置ずけられるものであるが統一新羅時代に改修整備され、あるいはその後高麗朝に大規模な改修整備などが行なわれているため創建当初の状況は塔・金堂・を一直線に配置した一塔式伽藍形態を取るものと従来から考えられているものの明瞭でない点が多くある。そしてこの形態は古くから北朝系と考えられて来たものである。

さらにもう一つの形態は立地条件を平地に求めたものでその伽藍配置が一塔式の塔・金堂・講堂が一直線に配置されたものである。この形態の寺院跡は大通寺跡であるがこの遺跡については正式な発掘調査の実施されたものではない。この大通寺跡の遺構については一九三〇年代の総督府時代付近一帯の下水工事等で礎石・基壇用材・古瓦など多く出土したといわれるが、この当時軽部慈恩氏によってその位置が図上にあてはめられたものとして現在残されている。その後発掘調査の実施されていない状況にあるため現在この資料が唯一の寺跡に関する資料である。この位置図から軽部氏によって次の点が指摘されている。

一、この寺院跡の寺名は文字瓦の存在から『三国史記』・『三国遺事』に見られる大通寺跡であることは古くから指摘されているごときである。

二、北方の建物基壇が確認され、その基壇は一段でその規模は東西五三m、南北二五mで基壇の主軸は西に二十度振れている。これは講堂跡基壇と推定される。

三、講堂南面基壇の南側に瓦片及び基壇の南辺が確認されこれを金堂跡と推定した。講堂跡基壇南辺から金堂基壇南辺までの長さは約四十三メートルある。

四、金堂基壇の南側にはその正確な規模が明らかでないが多くの古瓦片及び礎石が確認され、この建物基壇は塔跡と推定される。

五、塔跡基壇から南側約五六mの場所で中軸より東によった位置に幢竿支柱が存在する（これは現在も同じ位置に存在する）。

六、講堂跡の北側と西側にはこれもその正確な位置は明らかではないが寺域の西限及び北限と考えられる石積が存在したと思われる。

これらはあくまでも的確な数置とは思われないが、軽部氏の長年にわたる公州での研究生活による成果から考えて、その数置が大幅に異なったものとも思われない。したがって現在これ以外の資料が存在しない以上これを目安として大通寺跡について考えなければならない。まず規模の点であるが全体の規模は明らかでないからその長さのはっきりしているのは講堂跡基壇の規模及び講堂跡基壇から金堂跡基壇南辺までの長さである。講堂跡基壇についてはその規模が南北二五m、東西五三mとされる。表一は扶餘地方における百済時代寺院跡でのそれぞれの規模を抜き出して表にしたものである。これらの寺院跡での規模と大通寺講堂跡とを比較した場合軍守里廃寺跡講堂より南北では七m、東西で八m、それぞれ規模が大きく、また東南里廃寺とでは東

表1　百済時代寺院跡諸堂宇規模一覧

	中門	中門·塔間	塔	塔·金堂間	金堂	金堂·講堂間	講堂	中門·講堂間	金堂基壇南～講堂基壇南間
軍守里廃寺跡 東西		18 m	13.8 m	9 m	27 m	18 m	45 m	76.8 m	36 m (38)
軍守里廃寺跡 南北			13.8 m		18 m		18 m		
東南里廃寺跡 東西	16.8m	塔跡は存在しないので中門北側から金堂南側までの長さ		21 m	30 m	21 m	52.2 m	63 m	42 m (39)
東南里廃寺跡 南北	12m				21 m		21 m		
定林寺跡 東西	13.1m	14.555 m	3.75 m	17.025 m	20.55 m	17.35 m	27.05 m	68.28 m	32.95 m (40)
定林寺跡 南北	7.1m		3.75 m		15.60 m		13.1 m		
陵山里廃寺跡 東西	11.6m	7.695 m	11.73 m	7.865 m	21.62 m	16.26 m	37.4 m	59.77 m	32.42 m (41)
陵山里廃寺跡 南北	7.5m		11.79 m		16.16 m		18 m		
金剛寺跡 東西	13.2m	12.3 m	14.1 m	8.4 m	17.7 m	30.9 m	18.9 m	86.7 m	51.9 m (42)
金剛寺跡 南北	10.5m		14.1 m		21 m		45 m		
大通寺跡 東西							53 m		43 m (43)
大通寺跡 南北							25 m		

○この数値はすべて基壇の数値である。
○中門と塔跡間の長さは中門が北側で、塔は南側で計ったものである。
○塔跡と金堂跡間の長さは塔跡は北側で、金堂跡は南側で計ったものである。
○金堂跡と講堂跡の長さは金堂跡が北側で講堂跡は南側で計ったものである。
○最後の（　）内数字は註である。

西が〇・八m、南北が四m程大きくなることがわかり百済時代の講堂跡としては最大規模をもつ。金堂跡の規模は大通寺の場合明らかでない。しかし金堂跡南辺は、講堂跡南辺の位置からの長さが四三mとされる。したがってこれを仮に軍守里廃寺跡及び東南里廃寺跡と同様に講堂基壇南北長・金堂と講堂間の長さ・金堂基壇南北長が同じ長さと推定した場合、大通寺の金堂基壇東西長は二十五mとなり、また金堂跡基壇北側から講堂跡基壇南側までの長さは二十八mとなる。いずれにせよ金堂の規模においても百済寺院の中では現在のところ最大規模である。したがって寺院全体においても百済寺院としての規模も最大の寺院ということになる。また大通寺跡の中軸が西に約二〇度振れているとされるが、この点については百済時代寺院跡の例では昭和十三年に発掘調査された扶餘窺岩面外里遺跡がある(44)。ここでは塼列及び瓦片の散布状況から観た方向が西に振れているもののその振れは二十度はなく八度の振れである。この遺跡については寺院跡とする考え方もあるがその性格については必ずしも明らかでなく、また現状は削平されて遺跡が存在しない。その他の例では扶餘恩山面の金剛寺跡での中軸が東西方向である他(45)、その大半は北を主軸として東に振れるものあるいは南北方向に近いものであり、西に主軸の振れるものは現在のところ寺院跡では存在しない。また日本での例では法隆寺若草伽藍跡が同一の四天王寺式でかつ西に二〇度振れた伽藍中軸をもっている。

以上大通寺跡伽藍についてであるが、これらの諸堂宇、施設すべてが熊津時代のものでないことは幢竿支柱が統一新羅時代のものである

ことからも考えられる。また塔跡はその規模について明らかでないもののその状況から木塔であったと思われる。これらの点から大通寺はその伽藍配置が塔・金堂・講堂を南北方向へ一直線にした木造寺院建築であったことが判り、その伽藍配置は聖王十六（五三八）年に遷都した泗沘（扶餘）地域での寺院で多く流行した形式で、日本では直接影響を受けた四天王寺跡、法隆寺若草伽藍跡などの四天王寺式伽藍配置といわれるものである。大通寺の創建は武寧王の埋葬された年（崩御の年の二年後）から二年後の聖王五年（五二七）であるが百済における最っとも古い段階の木造建築寺院でありかつ百済式伽藍配置の本格的規模をもつ寺院であったと考えられる。つまり百済での塔・金堂・講堂を一直線に配置した伽藍配置をもつ木造建築寺院の出現・発生を考える上においてきわめて重要な意味をもつものと考える。今後大通寺跡の発掘調査の実施によって多くの点が明らかになることを期待するものである。

2　屋瓦

漢城時代

まず漢城時代の屋瓦といわれて来たものであるが、石村洞出土の瓦類はその技法的特徴あるいは瓦当文様等が楽浪郡時代の系譜をもつものと考えられ、その年式は漢城時代後半にあたる四世紀後半から五世紀初頭頃に位置ずけられ、現在のところ百済での最っとも古い段階に置くことができる。しかしこの瓦の系譜は次の熊津（公州）時代の瓦とは結びつかない様である。

次にソール市三成洞出土の問弁点珠形式八葉素弁鐙瓦がある。この瓦については多くの研究者によってその年代が考察されており、特に稲垣晋也氏はこの様式の瓦当文様は日本での豊浦尼寺建立にあたって七世紀初頭にもたらされた新様式で、その源流は中国六朝様式からの伝来の可能性が考えられると指摘した。そしてその源流の流通経路は三成洞遺跡の存在する漢江下流域が五五一年以来新羅の領域に属し、この地域を海上交通の基地として中国南北朝との交易が行なわれる。いわばこの瓦はこういった漢江下流域を母体として中国六朝様式が新羅経由で日本にもたらされたものと考えられた[46]。また亀田修一氏もこの考え方を一部支持し、この瓦が漢江下流域以外の熊津・泗沘の地域、あるいは新羅地域で出土していない点を指摘しながらもその年代を六世紀後半代と考えられた[47]。指摘されるごとき日本では類似する文様として大和豊浦寺及び周辺寺院、さらには河内・山城などややおくれて関東・九州地方に分布圏をもつものである。特に大和豊浦寺のものからその周辺地域での奥山久米寺跡、あるいは山城国の北野廃寺跡・広隆寺跡などに古い時期（七世紀初頭）この瓦文様が導入されたと考えられて来た。またこれらの瓦を生産した瓦窯跡も隼上り瓦窯跡・幡枝元稲荷瓦窯跡・北野廃寺瓦窯跡なども明らかとなっているところである。これら初期の頃の日本における有陵八葉連花文鐙瓦には豊浦寺跡での細長い弁端に丸味をもちそれぞれの弁端間には点珠形式をとるものと、北野廃寺跡・広隆寺跡出土の弁端が鋭く突出し、また間弁は逆

三角形平面をもち花弁端をつつむ形態のものの概ね二種ある。いずれもこれら日本の鐙瓦はその製作年代が七世紀初頭である。一方ソール市三成洞出土のこの瓦は瓦当面径十六・五㎝、中房は凸形で径二・八～三㎝、蓮子は一＋四課を配す。内区径十二・二～十二・四㎝を計る。花弁は端部に最大巾をもち、中房との連結部は幅がせまく、弁端は丸味をもちいくぶんかこれが反転する。花弁の配置は均等でない。この瓦当文様で、日本の豊浦寺系の花弁とことなる大きな点は豊浦寺の花弁が有陵であるのに対して三成洞の花弁はまったくの素弁である点にある。公州時代及び泗沘時代初期の瓦と比較して技法的には一般的な男瓦との接合法を取るが、蓮花文の形態がやはりことなっていることと瓦当面径がややこの時期のものよりは大きい。この種の瓦は現在のところ漢江下流域の地域からしか出土していないため、その系譜をたどることができない。いずれにせよ素弁である点から日本の豊浦寺系有陵弁に直接の祖型となったとする点については再度検討の余地がある様に思う。四七五年以降、百済漢山城陥落後高句麗の領域となるわけであるが、この八葉素弁鐙瓦の出土した三成洞等の遺跡が存在する漢江下流域の地（現ソール市域）はきわめて不安定な状況下にあり、たび重なる百済・新羅・高句麗三国によって戦乱のくり返えされた場所であった。特に新羅にとってのこの地域は中国南北朝との交易を行なう上で西海の一部海上ルート（制海権）確保という点からきわめて重要な地域であった。そして西暦五五一年（新羅真興王十二年。百済聖明王二九年）新羅とともに高句麗と戦って平壌を攻め漢城を奪回し、六郡の地を回復したとするが、その翌年には新羅によってこの地域がうばわれ、さらにこの地域での三国の対立が続く。以後新羅は中国王朝に対する海上交通の基地を南陽湾に置き、南北朝との交易がここを経由して行なわれる様になる。この漢江下流域の地域はこういった歴史的背景下にあった。この鐙瓦の年代がいつになるのかは今後の問題としても六世紀中葉頃まで逆ぼる可能性はある。こういったこの地域での歴史的背景を考えた時、高句麗・新羅・中国六朝での影響下で成立したにせよ、その後日本との関連を考える時直接の祖型とは考えがたい。

次にソール市広壮洞出土の八葉蓮花文鐙瓦であるがこの瓦当文様は中房が円球状に盛りあがり、外側を凹線で区画したもので他の資料では蓮子が一＋四課となっている。花弁は中央に陵をもつというより二面分割された形で弁端左右及び中央は角ばっている。おそらくこの瓦当文様もこの地域の歴史的背景を考慮するならば金和英氏の指摘のごとく[48]六世紀中葉頃までに高句麗の影響下で漢江流域の忠清北道の地域に成立した一蓮の瓦当の一群が存在するが、その後にこれらの流れの中で漢江下流域に出来たのがこの種の瓦当文様と思われる。これは、三国新羅における同種の瓦群についても同様と考える。

以上漢江下流域における三種の瓦群であるがこれらの背景を考えた場合石村洞出土の一群は百済漢城時代のものとすることができるが、その他の三成洞及び広壮洞出土の瓦群は百済の瓦として考えるよりむしろ高句麗あるいは新羅の影響下で考えるべきものと思われる。

この時期の瓦塼は泗沘地方でも存在するが今回は公州市に確認されるものについてあつかい泗沘地方については後日別にあらためて考えたい。公州での瓦塼は古墳の埋葬施設築造用塼、寺院跡およびそれに関連した遺跡出土のもの、公山城出土のものなどが現在まで確認されている。古墳埋葬施設築造塼には校村里二号墳・宋山里六号墳、武寧王陵などに使用されたものがある。そして宋山里六号墳からは昭和八年の発掘調査で羨道部羨門の閉塞用塼として発見された「造瓦銘文塼」が確認され、その後この銘文は「梁官瓦為師矣」と判読された[49]。つまりこの時期の造瓦は「南朝梁の官用瓦」を手本として百済では行なわれていたことが判り、その年代も宋山里六号墳は南朝梁の時代（五〇二～五三八）三十六年間に限定されることになった。そしてこの地域が古くから「百済王陵」伝承地であるところから、その被葬者が東城王・武寧王及びこれらの王に深く関連した人物と推定されるに至った。そして一九七一年に発見された武寧王陵閉塞用塼に発見された「……士　壬辰年作……」の銘文入塼がほぼこの宋山里六号墳出土の銘文塼からの関連年代を明らかにし、武寧王陵の埋葬施設築造塼が「壬辰年」つまり五一二年に製造されたものであることが判り、この時期の瓦塼について一年代基準を得ることになった。これら一連の塼について、武寧王陵塼には数種類の蓮花文塼がありこれが主体となっている。また宋山里六号墳の塼は武寧王陵塼と同一のものもあるが、その主体は対角線文と銭文を組合せたものである。また校村里二号墳の塼はその全体は明瞭でないが、武寧王陵塼と同様の蓮花文塼（図十一）が主体であったといわれる。しかし現在現物は不明である[50]。

これら一連の古墳及び塼について簡単に整理するならば、武寧王陵埋葬施設築造塼と同種または同笵のものは宋山里六号墳、校村里二号墳においても埋葬施設築造塼として使用されている。この年代については武寧王陵発見の「……士　壬辰年作……」銘文塼の「壬辰年」は五一二年（武寧王十二年）にあたる。武寧王の崩御は五二三年五月で王陵に葬られるのは二年五ヵ月後の五二五年八月である。したがって武寧王陵埋葬施設築造用塼は少なくても王の崩御する十一年以前に作成されていたことになる。ただここで問題となるのはこれらの塼は武寧王陵だけに使用されたものではなく校村里古墳郡及び宋山里古墳群でも使用されているため武寧王陵埋葬施設専用のために焼かれたものではなく百済王族の埋葬施設用の塼として生産されていたものと考える。いずれにせよその年代は五二五年より以前ということになる。

宋山里六号墳と武寧王陵との前後関係は、宋山里六号墳では武寧王陵に見られる蓮花文と忍冬文の組合せた塼は存在するものの、その数はきわめて少なくそれも閉塞用にのみ用いられたものであること、また、宋山里六号墳築造用主体塼が一部武寧王陵塼として使用されているなどの点から武寧王陵に宋山里六号墳が先行すると考えられて来た。また校村里二号墳については宋山里二号墳に先行するとする軽部慈恩氏の指摘がある[51]。またこの古墳群は早い時期に破壊されたもので、その理由は羅城建設に伴なって熊津時代に行なわれたものであるとされ

る。ただこの点については武寧王陵の発見によってその埋葬施設に使用されている塼は校村里二号墳に使用された塼と同一塼であることが明らかになった。校村里古墳群は宋山里古墳群が営なまれた隣接する南側に位置する二十数基からなる古墳群といわれるが現在は存在しない。これらの古墳はいずれも熊津時代における羅城建設に伴なって移転または破壊されたと軽部氏は指摘するが[52]最近までの調査結果ではこの場所及び隣接した場所には熊津時代羅城の痕跡は確認されていない。ただ軽部氏の見解である、遺構の残存状況から判断した墓地移転説はきわめて興味ある問題である。つまりこの移転の理由は軽部氏の考える羅城建設によって、その内側に墓地の存在をさけるための移転ではなく、むしろ別の理由による移転と考えるべきではないだろうか。その理由は聖王十六年（五三八）所夫里（泗沘）への遷都と関係があったものではなかったかということである。つまり想像するならば武寧王と王妃の崩御及び改葬の後に、以前から計画されていた所夫里遷都が急速に進行し現実化した。そして一方では次の聖王及び王妃、皇族・貴族などの墓地がそれぞれ熊津（公州）の地に築造及び築造進行中であったと考えられる。しかしこれは所夫里遷都の現実化にともなってこれら聖王とその王族墓は熊津の地での必要性がなくなり、これも新に所夫里の地への墓地建設に計画変更を余儀なくされたものではなかったか。この聖王及び王族の墓地が校村里古墳群であったと推定するのも一つの考え方ではないだろうか。この様に考えた場合校村里古墳群の廃止、または塼の再使用（所夫里遷都後は使用されていない）、移転といった点に納得ができる。また校村里二号墳出土といわれる塼はその大半の現物が存在しないため直接比較することは出来ないが、写真で見るかぎりきわめて同笵に近いものと思われる点についても納得できる。

次に瓦の問題であるが公州市内では水源寺跡・南穴寺跡・舟尾寺跡・西穴寺跡・大通寺跡・鳳凰洞・公山城跡・艇止山遺跡などでこの時代の瓦が確認されている。そしてこれらの瓦はいずれも鐙瓦で宇瓦は出現していない。これらの瓦類は瓦当文様のおおまかな形態から、一、弁端尖形式、二、弁端反転突起形式、三、弁端反転形式、四、花弁二面分割形式の四形態に分かれる。

一、弁端尖形式　素弁八葉蓮花文で瓦当面径は内区で十八～十二㎝、瓦当厚中央で約二㎝、中房は凸形で径約四・二㎝、それよりもやや大きなもので五㎝程のものがある。蓮子は一十四課、花弁は長さ約三・七～三・九㎝、最大幅約二・九～三㎝程で、花弁の大きな特徴は丸味をもった花弁を構成し、弁端が反転せず先端が尖っている。また間弁は底辺の長い逆三角形平面をもち花弁をつつみこむ形をとるが界線は中房と連結しない。全体的に彫の深い瓦当面である。この種瓦当文様は現在のところ公州市内で西穴寺跡（図五―一）、大通寺跡（図六―一）、舟尾寺跡より出土し、いずれも三寺院跡ともにきわめて類似するものである。そしてこれらの瓦は現在のところ公州の地域のみで出土し、泗沘地方では出土していない。

二、弁端反転突起形式　この形式をもつ瓦はいずれも素弁八葉蓮花

文で花弁は弁端がするどく反転突起するものと、反転突起するがあまり鋭くないものの二種ある。また反転突起は点珠状をなすものもある。間弁は底辺の長い逆三角形平面を呈し、いずれも花弁をつつみこむ形を取り、界線は中房と連結する。中房には凸形と端部を圏線で囲むものもあるが後者は泗沘時代のものと考える。蓮子は一＋六、一＋七、一＋八課のものがある。この種の瓦は大通寺跡、鳳凰洞、公山城跡で出土する他、泗沘地方でもこれらの瓦と同笵またはきわめてそれに近いものが多くの寺院跡・官衙などで出土しており、これらの詳細な比較が今後の課題と考える。

三、弁端反転形式　この種の瓦当も素弁であるが、八弁と十弁のものがある。八弁のものは十弁に比較してそれよりも小型の瓦当面をもつ。花弁は弁反が反転するのみであるがそれもあまり鋭さはない。間弁は底辺の長い逆三角形平面で界線は中房と連結する。中房には凸形と端部を圏線で囲むものがあるが、後者は泗沘時代のものと思われる。中房にもやや大型のものと小型の二種あり、蓮子には一＋六、一＋八課等がある。大型中房をもつものは瓦当面形も大型である。小型の瓦は艇止山遺跡から出土しており、この他に宋山里六号墳出土塼ときわめて類似の塼が伴なっているところから、その年代が六世紀前半（五二五年以前）に位置ずけられ、後者の大型瓦は公山城より出土するものである。両者ともに泗沘地方からは現在まで確認されていない。

四、花弁二面分割形式　この種の瓦には大通寺出土（図五―六）のものと晩日寺跡で出土しているといわれているものがあるが、大通寺跡出土のものが軽部慈恩氏著『百済美術』[53]に拓本のみが残されているだけで現在いずれも現物は存在しない。したがって詳細については明瞭でない。

本　레포트　作成에　있어서　国立扶餘博物館長　徐五善、室長　金正完、学芸研究室　金成明・公州大学　教授　李南奭・国立公州博物館長　金英媛、研究室　李漢祥、신영호・国立中央博物館　金妍秀・서울大学校博物館　崔鍾澤　등　여러분에게　큰　도움을　받았습니다、특히　国立扶餘博物館　金鍾萬씨는　여러　가지로　많은　도움을　주어　대단히　감사합니다。（一九九八・一〇・국립부여박물관 학예연구실에서）

註

（1）黄寿永「百済の美術」『世界美術全集』2　文化教育出版社　一九六二年

（2）金元龍『風納里包含層調査報告』ソール大学博物館　一九六七

（3）朴容塡「ソール市三成洞出土古瓦」『考古美術』一二九・一三〇合併号　一九七六

（4）井内功「ソール特別市清潭洞遺跡と出土瓦について」『井内古文化研究室報告十九』一九七七

（5）亀田修一「百済漢城時代の瓦に関する覚書――石村洞4号墳出土例を中心として――」『尹武炳博士回甲記念論叢』一九八四

（6）稲垣晋也「新羅古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」『田村圓澄・泰弘夔編新羅と日本古代文化』吉川弘文館　昭和五十六年、この稲垣

晋也氏の同じ論文は斉藤忠編『日本考古学論集10』「日本と大陸の古文化」昭和六十二年吉川弘文館　刊行にも収録されている。

(7) 亀田修一「百済古瓦考」『百済研究』十二忠南大学校百済研究所　一九八一

(8) 今西龍『百済史研究』近澤書店　昭和九年

(9) 軽部慈恩『百済遺跡の研究』吉川弘文館　昭和四十六年

(10) 註(8)に同じ

(11) 発掘調査報告書については現在まで刊行されていない。

(12) 軽部慈恩「西穴寺及び南穴寺址」『考古学雑誌』第一九巻四・五号　一九二九年

(13) 軽部慈恩『百済美術』宝雲舎　昭和二十一年

(14) 朴容填「西穴寺及び南穴寺址調査研究」『公州教育大学報』第一七号　一九八六年「公州の西穴寺址と南穴寺址に関する研究」『公州教育大学論文集』第三号　一九六六年

(15) 朴容填「公州舟尾寺跡についての研究」『百済文化』第三号公州師範大学附設百済文化研究所　一九六九

(16) 註(15)に同じ

(17) 註(12)に同じ

(18) 金永培「公州西穴寺址と遺物」『考古美術』六巻五号　一九六五

(19) 朴容填氏が西穴寺についての研究には次の様なものがある。

「西穴寺址及び南穴寺址調査研究」『公州教育大学報』十七　一九八六

「公州の西穴寺址と南穴寺址に対する研究」『公州教育大学論集』第三号　一九八六

「公州出土の瓦当に関する研究」『公州教育大学論文集』第四号　一九八七

「百済瓦当に関する研究」『公州教育大学論文集』第五号　一九八八

「公州西穴寺址に関する調査研究1」『百済文化』第四号　一九七〇

(20) 註(13)に同じ

(21) 註(13)に同じ

(22) 金永培「天安晩日寺址踏査記」『考古美術』第四巻十一号　一九六三年

(23) 李殷昌「聖居山晩日寺調査報告」『文化』第五・六合併号　一九六九

(24) 野守建・神田惣蔵「忠清南道公州宋山里古墳調査報告」『朝鮮古蹟調査報告』昭和二・五年　朝鮮総督府　昭和十年

(25) 軽部慈恩「楽浪の影響を受けた百済の古墳と塼」『考古学雑誌』二十巻第五号

(26) 註(13)に同じ

(27) 註(9)に同じ

(28) 註(9)に同じ

(29) 註(9)に同じ

(30)『公州錦城洞艇止山百済遺跡』国立公州博物館　一九九六

(31) 註(9)・(13)に同じ

(32)『公山城』公州師範大学百済文化研究所・忠清南道　一九八二

(33)『公山城百済推定王宮址発掘調査報告書』公州師範大学校博物館　一九八七

(34)『公山城　城址発掘調査報告書』公州大学校博物館・忠清南道　一九九〇

(35)『公山城建物址』公州大学校博物館　一九九二

(36) 註（6）に同じ　秦弘燮「百済寺院の伽藍制度」
(37) 舟尾寺跡については一九七九年度に国立公州大学によって発掘調査が実施されており、報告書は現在未刊であるが、寺跡の現状は南ゆるやかな南斜面を三段程の平坦地に削平した南端部は石積によって整えられていたのを現地で見ることができた。
(38) 石田茂作「扶餘軍守里廃寺址発掘調査（概要）」『朝鮮古蹟調査報告昭和九・十一年』朝鮮総督府　昭和十二年
(39) 石田茂作・斉藤忠「扶餘に於ける百済寺址の調査（概報）―甲　扶餘東南里廃寺址発掘調査――」『朝戦古蹟調査報告　昭和十二・十三年』朝鮮総督府　昭和十五年
(40) 尹武炳『定林寺址発掘調査報告書』忠南大学校博物館　一九八一
(41) 金鍾萬『扶餘陵山里遺跡』第四〇回全国歴史学大会発表資料　一九九七
(42) 尹武炳『金剛寺』国立博物館古蹟調査報告第七冊　国立博物館　一九六九
(43) 註（9）・註（13）に同じ
(44) 有光教一「扶餘窺岩面に於ける文様塼出土の遺跡と其の遺物」『朝鮮古蹟調査報告　昭和九・十一年』朝鮮総督府　昭和十二年
(45) 註（42）に同じ
(46) 註（6）に同じ
(47) 註（5）に同じ
(48) 金和英「塔坪里出土蓮華文瓦当」『考古美術』一二九・一三〇合併合一九七六
(49) 註（9）に同じ
(50) 軽部慈恩氏は日本時代公州に十八年間滞在し、多くの研究にたずさわったわけであるが、この期間中多数の瓦塼類を収集した。解放後はこれらの瓦塼類はすべて韓国に置いて帰国したといわれるが、それらの多くは昭和二六年の朝鮮戦争によって保管されていた大田市内の施設が火災となり焼失したといわれている。なお一部焼失をまぬがれた遺物については国立博物館に保管されているといわれる。
(51) 註（9）に同じ
(52) 註（9）に同じ
(53) 註（9）に同じ

（本学助教授・歴史考古学）